

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

10月8日、斑鳩神社の秋祭り宵宮の日。辰12時半過ぎ、法隆寺門前の松並木が途切れた所にある観光案内所を出たとたん、太鼓の音が聞こえてきた。先頭に「斑鳩天満宮」の大幟2本に大人たちの太鼓台(布団太鼓)が続き、さらに提灯20張りを三角形に吊り下げ、頂点に御幣のついたダイガク(台昇、提灯台)を子供たちが取り廻している。並松の一団だ。静かな法隆寺の門前広場が、一度に賑わいに包まれ、修学旅行生も珍しそうに眺めている。

法隆寺の西院伽藍東側の築地塀沿いの細い道を北に歩くと天満池といふ池の堤下に行き当たる。右手奥の低い山も天満山といい、斑鳩神社はこの山に鎮座する。元は「天満宮」といい、菅原道貴を祀っている。平安時代の10世紀前半に、菅原氏

の末裔で法隆寺第九代別当の湛照が寺の鬼門の方角に鎮守として祀り始めたという。明治維新を迎えて仏教と神道を分離する「神仏分離」が強行され、寺境内の西北に祀られていた地主神である惣社明神や東院の鎮守である五所明神、さらに白山権現など法隆寺境内の神々が明治2(1869)年以降、この天満宮に合祀された。

こうした縁縛をもつ斑鳩神社は、法隆寺のある大字法隆寺を構成する東里二町、五丁町、並松、西里の人々の氏神として信仰されてきた。秋祭りにはこれらの地区の人々が、青年は太鼓台を、子供たちはダイガクを担ぎ出して、神輿とともに法隆寺境内の御旅所まで渡



斑鳩神社の太鼓台など。左奥は夢殿

—2022年10月8日、筆者撮影

もダイガクも少しづつ違う。

(2019)年以来3年ぶりのお渡りで、その場の人々も活気づいてい

る。ただ今年は太鼓台は肩に担がず、台車での移動となつた。一行は南門

前の大広場まで進んだが、

神輿だけが南門を潜って境内に入り、総封蔵の東

側の御旅所に着いた。普段であれば、御旅所南側

の広場に太鼓台などを集

む

午後2時過ぎ、三町が先頭になり、後で鼻高の2本を先頭に、太鼓台とダイガクが1組になり、5地区合わせて10台が次々に繰り込んでくる。午後1時過ぎには勢ぞろいに晴れ着姿の5、6歳の女児が紅白の綱を引いて神輿などの行列が進む。さらにつけたままだ。お祭りの一層の楽しさと興奮はおあづけとなつた。太子信仰が通奏低音として流れ、息吹を吹き込む祭りの姿にまた触れたい。

（奈良民俗文化研究所代

斑鳩神社の法隆寺渡御

表

御^幸、お祭りを行うのが習わしとなつていて、法隆寺の東院と西院の間は少し離れて、広い石畳の道で繋がつていて、晴れ着姿の5、6歳の女児が紅白の綱を引いて神輿などの行列が進む。さらにつけたままだ。お祭りの一層の楽しさと興奮はおあづけとなつた。太子信

仰が通奏低音として流れ、息吹を吹き込む祭りの姿にまた触れたい。

今年は全員がマスクをつけたままだ。お祭りの一層の楽しさと興奮はおあづけとなつた。太子信仰が通奏低音として流れ、息吹を吹き込む祭りの姿にまた触れたい。

（奈良民俗文化研究所代